

まえがき

2010年3月31日、新年度に入るに当たってぼくは次のような一文を自分の発行しているメールマガジンに書きました。仕事や活動、そしてわずかばかりの思索の過程で、ふと浮かんだことでした。

◆新しい自我観が芽を出しつつある◆

現代の時代精神の主流となってきたのは、いわゆる「西欧近代主義」とでも呼べるものでした。そして今もその状態は続いています。西欧近代主義を一言で説明するのは困難ですので、近代から現代に至る過程に現れたことを大雑把にたどってみます。

西欧近代主義はルネッサンスの頃に芽生えました。ルネッサンスは、それまでの宗教的色彩の強い社会から脱皮し、近代社会に向かう胎動でした。即ち、宗教の制約を抜け出そうとする文化人や芸術家たちの活動を通して、人々の自我観が変り始めたのです。

そんな流れの中で、政治的には多くの革命が起こり、経済的には土地に制約されることのない産業が興り、文化的には理性に軸足を置く思想が展開されてきました。そして、現代につながる最大の契機、科学上の発見や産業革命がもたらされたのです。

こうした流れの中で生まれ、現代に至るまで一貫して支配的であった時代精神を「西欧近代主義」と呼ぶことができます。その根幹にある考え方やものの見方は、理性的、合理的、論理的、分析的、科学的、といった言葉で代表されます。

そして当然のことですが、この時代精神の背後には、社会的かつ歴史的影響力の強い大思想がありました。フランシス・ベーコン、デカルト、ジョン・ロック、といった人たちの思想です。いずれも16世紀から17世紀にかけて活躍した哲学者です。

ベーコンは経験論の立場から、帰納法によって思考し判断すること、及びそれによる経験的科学を提唱しました。

デカルトは「近世哲学の父」と呼ばれ、思考する理性をもとにして演繹的に知識を組み立てていく合理主義への道を開きました。

ロックは「経験論哲学の祖」と呼ばれ、全ての知識は観念の複合であり、観念は経験に

よって白紙の心に書き込まれる、という認識論を展開しました。

そして、これらの思想に共通していることは、次のようなことでした。

- ・ 学問や知識の究極の目的は、自然に対する人間の支配力を増大させることにあり、そのために物事の真の原因を明らかにする必要がある。

こうした西欧近代主義の根底にある自我観を、端的に表現している有名な言葉が在ります。デカルトによる次の一言です。

「我思う、故に我あり（コギト・エルゴ・スム）」

16世紀から現代に至るまで、私たちはこの一言を、暗黙のうちに自己の思考と行動の基準にしてきたのでしょうか。そして、その結果として、いま現在の世界があるという訳です。

この「我思う、・・・」を奉じて、私たちはどのようなものを創造してきたのでしょうか。そして、いま現在の世界はどのような状態になっているのでしょうか。説明する必要もないことですが、幾つか上げてみます。

- ・ 自由、平等を標榜する社会が実現した
- ・ 個人の個性や人権が重視される社会になった
- ・ 科学の発展と技術の進歩があり、かつてないほど人々は豊かになった
- ・ 人間の自己中心的な活動によって地球環境が危うくなっている
- ・ 財や利益の追求に狂奔する人々が増え、不安定な社会になっている
- ・ 金銭的富裕層への憧ればかりが強くなり、文化的に裕福になることや、精神的に裕福になることに価値を感じる人々が少なくなった

というようなことが浮んできます。

西欧近代主義の自我観はこの400年ほどの間に、歴史上類を見ないほどの素晴らしいことを私たちにもたらしました。その一方では、このまま進めば私たちの生存環境が危うくなりそうだ、という状態を生み出しています。そろそろ、新しい自我観を求めて考動すべき時に至った、と言ってもよいでしょう。

新しい自我観とは、人と人とのコミュニケーションの質を高めるものだろうと思われまます。そして同時に、地球上にある万物の存在に価値を認めるものだろうと思われまます。

自分が考え、思うことに自己の存在基盤があるということから、さらに一步前進する必要があると思うのです。いまの時代、自分一人だけで孤高に生きることは不可能です。周囲の万物の存在を破壊しながら生きることも不可能です。

- ・ 学問や知識の究極の目的は、自然や周囲の人々と共存共生しあう
人間の能力を増大させることにあり、そのために物事の真の在り方を
明らかにする必要がある。

という考え方が必要だと思うのです。

周囲の人々との間で相互に感じ合うことが、生きる上で不可欠になるだろうと思います。周囲の万物の存在意義を感じ取り、自己の存在を感じてもらうことが、生きる力をもたらしてくれるのだろうと思います。

「我思う、故に我あり」に一言加えて、次の言葉を提言します。

「我交感す、そして思う、故に我あり」

人と人との間で感じ合う。人と万物との間で感じ合う。そこにこそ自己の存在の根源があるのだ、という自我観がこれから必要になるだろうと思っています。

「西欧近代主義」をもっと深掘りしてみたいとの気持ちに火を着けたのは、この一文を書いたことだったようです。しかし、本格的にそれをやるとなったら大事です。ぼくに残された時間ではとても叶うはずがありません。やれるところまでやってみよう。それが、ぼくが真面目に生きた証になるかもしれない。この取り組みはそんな思いから始まったのでした。